

氏 名 (本籍)	鹿嶋真弓 (東京都)
学位の種類	博士 (カウンセリング科学)
学位記番号	博 甲 第 6174 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	中学生の充実感と担任教師による自律支援的指導態度に関する研究
主 査	筑波大学准教授 博士 (心理学) 田 中 輝 美
副 査	筑波大学教授 医学博士 小 玉 正 博
副 査	筑波大学教授 博士 (心理学) 藤 生 英 行
副 査	筑波大学教授 博士 (心理学) 濱 口 佳 和

## 論文の内容の要旨

### (目的)

教師は、生徒が充実した学校生活を送れるよう働きかける必要がある。充実感は情動の高揚感がある生活気分と捉えることができ、その背景には自分の人生を主体的に生きるといった自律があると考えられる。そこで本論文は、中学生の充実感に影響を与える担任教師による自律支援的指導態度や学級集団意識を捉え、担任教師の自律支援的指導態度による学級集団の発達過程に注目したプロセスモデルを作成・検証し、中学生の充実感を高めるための担任教師による自律支援的指導態度において有用な知見を得ることを目的とした。

### (対象と方法)

本論文では、中学生とその担任教師を対象とし、調査による量的分析、聴取に基づく質的分析、介入による実際の変化を分析する計 10 研究を実施した。

### (結果)

第 3 章 (研究 1、研究 2) では、中学生を調査対象として、研究 1 で中学生の充実感尺度を作成し、研究 2 では担任教師からの期待と充実感の関係について検討し、中学生は担任教師からの期待のうち、社会化に関する内容より、自分の将来のためになる内容の方を受け止め実行していることが示された。

第 4 章 (研究 3、研究 4) では、中学生を調査対象として、研究 3 で学級集団意識尺度を作成し、研究 4 で学級集団意識と生徒の充実感を検討した結果、学級集団意識の 4 つの次元が中学生の充実感の各下位尺度に影響を与えていることが明らかになった。

第 5 章 (研究 5、研究 6-1、研究 6-2、研究 7) では、中学生の充実感と担任教師による自律支援的指導態度と学級集団意識の関係について検討した。担任教師をインタビューの対象として、研究 5 では修正版 M-GTA によって中学校の自律支援的学級育成モデルを作成し、研究 6-1 では KJ 法による分類から 4 つの中位概念を得た。研究 6-2 では、教師を調査対象として担任教師による自律支援的指導態度尺度を作成し、研究 7 では、担任教師による自律支援的指導態度が学級集団を媒介して中学生の充実感に影響する因果モデルを検討し、部分的ではあるが、担任教師による自律支援的指導態度が学級集団意識を媒介して中学生の充実

感へ影響することが明らかとなった。

研究8(第6章)では、学級の中で日常的に起こり得る学級のトラブル場面に対する教師の自律支援的指導態度のプロセスについて、修正版 M-GTA を用いて話を聞くカテゴリー、自分の考えと向き合わせるカテゴリー、学級の将来を考えさせるカテゴリー、信じてカテゴリーの4つのカテゴリーからなるモデルを作成した。研究9(第6章)では、研究5で作成した中学校の自律支援的学級育成モデルをもとに相談計画を作成・実施し(4月から約2ヶ月間、週1回全8回)、相談前後で中学生に質問紙調査を行い、担任教師の自律支援的指導態度の価値観育成機能および充実感の自己否定感に関してはほぼ一定の効果が得られた。

#### (考察)

本論文では、教師の自律支援的指導態度が中学生の充実感に直接影響するのは信頼感形成機能と価値観育成機能で、その他は学級集団意識の学級結束を除くすべての下位尺度を媒介として、中学生の充実感を高めていくことが明らかになった。すなわち、中学生の充実感には、教師の自律支援的指導態度は直接的には影響はしないが、自律支援的指導態度によって学級集団意識の育成をはかることが効果的であることが示唆された。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

中学生が充実感を持って学校生活を送れるよう教師がどのような指導を行ってゆけばよいのか、という教育現場の切実な問題をテーマに取り組んだ本論文は、社会人大学院での学位論文として非常に意義がある。調査研究のみならず、インタビューによる質的研究を積み上げ、最終的に実際に教育現場に介入して効果を検証するという、様々な研究手法を駆使して積み上げた知見は、乖離しがちな研究と実践を融合させたものであり、実践的研究のモデルとなる研究といえる。発達の側面の考慮や追試実施の必要性など今後の課題を要する部分もあるが、教育現場に直接的に提言できる知見を含む社会的に意義のある研究として評価できる。

平成24年1月21日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(カウンセリング科学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。